

修士 (2015 年度)

歴史的環境を残すことの社会的意味 ——石垣島の井戸を事例として——

柿沼 拓弥

1. 研究概要

本論文では、石垣島の井戸は「なぜ残されているのか」という問いに答えることで、歴史的環境の保存が持つ社会的意味の一側面を明らかにすることを目的とした。聞き取り調査の結果見えてきたものは、井戸が集落の・家の・個人のアイデンティティを支える象徴として機能している様相であった。

2. 先行研究・問題設定

日本には、井戸を埋めてはいけないという禁忌が中国思想と結びついた形で存在している。しかし、石垣島の事例、とくに市の公募事業に参加し、井戸を復元・利用できる形にしたという積極的な取り組みについては、魂魄思想による禁忌のみによって説明しきれものではない。

本論文では、井戸を「住民の環境に対する働きかけおよび共同体の生活形態や文化の蓄積」(吉兼 1991: 9)としての「歴史的環境」と捉え、分析を行った。森久聡は、社会学における歴史的環境への取り組みは、その保全において「なぜ保存するのか」という問いに答える「保存の論理」を求めるものであったとし(森久 2005: 146)、その保存の論理を、「保存する根拠」と「保存する戦略」の2つの概念に分節化し、これまでの研究は前者を十分に解明できていないことを指摘している(森久 2005: 148)。

また、沖縄県での事例に、鳥越が示した糸満市の与座ガーの親水公園化があるが、その結果は、水場としての与座ガーの持っていた空間を考慮しないものであった(鳥越 2012: 135-137)。この現象は、住民の保存の論理と、行政の保存の論理との間にずれが生じていたことが原因のひとつと考えられる。

その点をふまえて、本論文においては、①市・行政、②公募井戸、③島内の他の井戸の保存の論理を対照させながら、住民にとっての「保存の論理」を考察した。

3. 調査と分析

本論文においての調査として、沖縄県石垣市に2014年から2015年にかけて、合計3回、29日間のフィールドワークを行った。主な調査対象としたのは、市の公募事業によって整備された井戸5箇所に加え、その周辺の井戸2箇所である。聞き取り調査によって、これらの井戸の歴史、整備までの経緯、住民の井戸に対する思いを調査し、そこからそれぞれの持つ保存の論理を考察していった。

まず、石垣市の整備事業における井戸の保存の論理を示した。これに関しては、市が「まちなかの観光スポットとしての利用や市民の憩いの場、また災害時における水の再利用」を目的に井戸を整備するものであると公表しているため明らかであった。

次に、整備事業の公募に応募した井戸について、井戸の持ち主や周辺住民への聞き取りを行った中で見えてきたのは、井戸が持つ集落にとっての価値・重要性であった。それは

単に共同で利用していたということによるものではなく、集落の祭祀に用いる水を汲む場所として、あるいは祈りを捧げる場所そのものとして深く関わっていたり、農業における暦の指針となっていたり、集落内での井戸の共同利用にともなう交流が、姻戚関係の形成につながっていたりなど、それぞれの井戸において、様々な形で表れていた。

一方で、整備事業には参加していない、その他の多くの井戸についての聞き取りからは、住民の、自分の家の井戸に対する深い愛着・思い入れと、井戸が家の象徴のひとつであるという意識が見えた。ある家では、自身が幼いころから毎日遠くまで水を汲みに行くことの苦勞の記憶とともに、屋敷内に井戸が掘られたことのありがたさが切実に語られた。またある家では、転居した際に井戸の上の部分を新しい土地に掘った井戸にわざわざ移したこと、その井戸を「先代が苦勞して掘ったものだから」と改めて利用するようになったことが語られた。また、住民からは「家を建てて、井戸を掘って、墓を立てて一人前」という説明がしばしば聞かれた。

整備事業に応募した井戸とそれ以外の井戸の聞き取りのなかで共通してみられたものは、井戸を掘った先祖への畏敬の念であった。それは後者においてのみならず、前者のようなコミュニティの井戸においても、住民の語りや、頌徳碑の存在に表れていた。それぞれの井戸と住民とのかかわりが語られる根底には、この先祖へのまなざしが常に存在している。

4. 結論

これら3者の対照から見えてくる、井戸という歴史的環境に対する保存の論理はどのようなものであったか。結果として見えてきた、井戸に対する住民の保存の論理は、①コミュニティのアイデンティティと、②個人・家のアイデンティティを支える象徴として保存される、というものである。そしてそれらのアイデンティティを継承させるものは、井戸を通じて想起される先祖への畏敬の念、過去と現在がつながっているという意識であった。そのようにして「共同体の生活形態・文化の蓄積」が続いていることで、石垣島の井戸は歴史的環境となっているのである。

今回の市の公募事業に応募した井戸の井戸主たちは、上に挙げたような保存の論理を直接に主張することはしてこなかった。市が掲げた保存の論理を、保存する戦略として適用することで、アイデンティティの継承という保存の論理と市の思惑とのズレを吸収しつつ、井戸の復元・再利用を円滑に実現させることができたのである。ここには、上述した住民の保存の論理が、保存する戦略の裏に抱える一貫した保存する根拠として存在している。

参考文献

鳥越皓之, 2012, 『水と日本人』 岩波書店。

森久聡, 2005, 「地域社会の紐帯と歴史的環境——瀬港保存運動における<保存する根拠>と<保存のための戦略>」『環境社会学研究』 10: 145-159。

吉兼秀夫, 1991, 「歴史的環境と住民生活——奈良県明日香村住民意識調査を中心として」『環境社会学会ニューズレター』 4: 9-10。